

子宮頸がんワクチン問題～社会・法・科学
～私にとっての この37年～ 大熊由紀子

★★1984年9月28日の朝日新聞社説で、

「妻やごく親しい女性を子宮頸癌がんにかからせてしまう物騒な男性がいるという研究結果が最近出た。浮気な夫の妻ほど子宮頸がんにかかりやすいという。この男性たちが、イボをつくるウイルスとして知られるパピローマがウイルスを女性から女性へ運んでいるらしい」

家庭争議がおこらないように苦労して書いた社説

重要なことは、このウイルスは、空気感染などしないということです。

★★2010年2月26日

医師たちのML [fmj2] [00649] でのやりとり……

私:「HPV ワクチンの早期承認と公費負担の実現を図る「子宮頸ガン征圧をめざす専門家会議」がスタートし、モナコの学会にジャーナリストたちが招待されました。利益相反が始まる兆しではないでしょうか？」

小児科医:「僕個人は、ワクチンしておけば確実に死ななかったのに、してなかったために死んだ子は、何10人と看取っています。一方、ワクチンで障害を受けたと思われる子も数人、障害者の専門病院で対応したことがあります。数でいうと死んだ子のほうが、障害を受けた子より多いかな？」

私:「ご経験になっているような感染症と違い、子宮頸がんは、早期発見・早期治療で死を免れることができます。「ワクチンしておけば確実に死ななかったのに、してなかったために死んだ」という種類の感染症と、この「ワクチン」は、事情が違うと思います。」

★★2014年4月19日

福祉と医療・現場と政策の「新たなえにし」を結ぶ会

ことしもまた、新たな縁(えにし)を結ぶ会'14!

第3部 大研究・利益相反と癒着の構造

～学界・業界・政界・官界・メディア/利権としがらみ～

元NHK記者でいまは大学教授の隈本邦彦さんが
"森のくまさんでる"教授を名のって歩き回り、
サンデル教授の白熱教室風に(^_^)☆

基調報告&コメンテーター

桑島 巖さん 循環器内科医/臨床研究適正評価教育機構理事長
別府 宏園さん 神経内科医/TIP 正しい治療と薬の情報代表
水口真寿美さん 弁護士/薬害オンブズパースン会議事務局長

コーディネーター

隈本 邦彦さん 江戸川大学メディアコミュニケーション学部教授/元 NHK 記者

特別ゲスト

北野 静雄さん 製薬研究者/大鵬薬品工業労働組合元中央執行委員長

◆会場◆イイノホール

2014.4.19 SAT.



第1章 子宮頸がんワクチンに見る利益相反

検討委員は誰の味方? / 「専門家会議」の利益相反 / 政治家は、こう動く
宣伝に貢献したジャーナリズム / WHOあなたまで! / ロビイストはこう暗躍する

第2章 医療界が溺れてしまう構造

第3章 犠牲になる患者たち

第4章 メディアが共犯者になる...地獄への道は、善意の小石で敷きつめられている

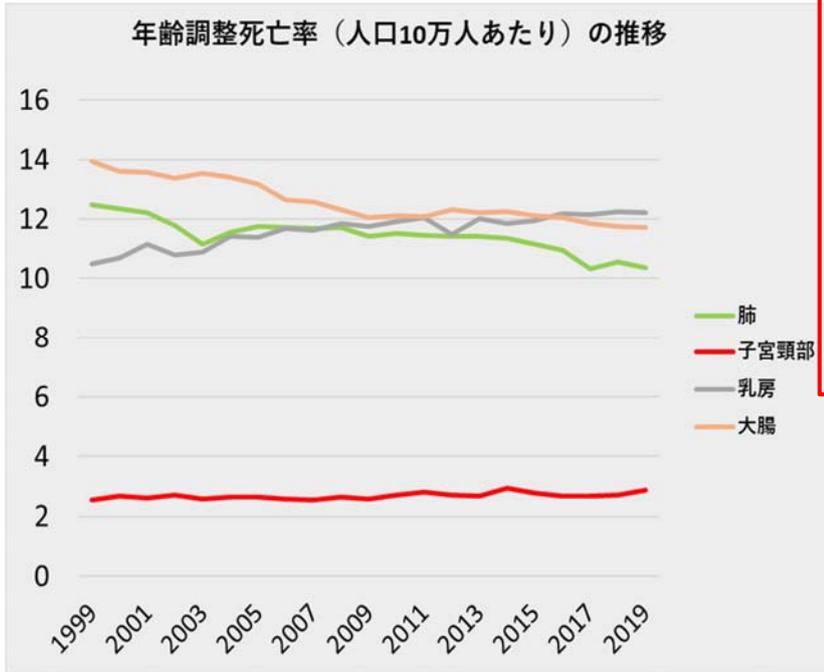
第5章 癒着を引きはがす処方箋



3時間半、席を立つひとがいなかった夜の部

このシンポジウムの記録は、えにしのHP (「ゆきえにし」で、出てきます)の「ことしもまた「えにし」の会の部屋 2014」を
<http://www.yuki-enishi.com/enishi/enishi-00.html#2014>

このような基本情報さえ、伝えないメディア



子宮頸癌は検診で前癌病変で発見できる 珍しいがん
 早期発見で赤ちゃんも産める

女性にとっては、乳癌、大腸癌 肺がんの方がずっと怖い

ワクチン接種しても、2年に1回 子宮頸がん検診が必要

副反応疑い報告 (100万接種あたり)

HPV	355.8
4種混合	36.6
風疹	28.5
日本脳炎	23.9

えにしのHP(「ゆきえにし」ですてきます)。その中の「子宮頸ガン予防？」ワクチンの部屋基礎的情報
<http://www.yuki-enishi.com/kusuri/keigan-00.html>

キノホルムをやめたら……スモンがなくなった
 サリドマイドの発売をやめたら……フォコメリアの赤ちゃんが激減した
 ウイルス入りの非加熱製剤をやめたら……薬害エイズは、なくなった
 健康局長通知が出たら症状発現が激減……それなのに、なぜ再開??

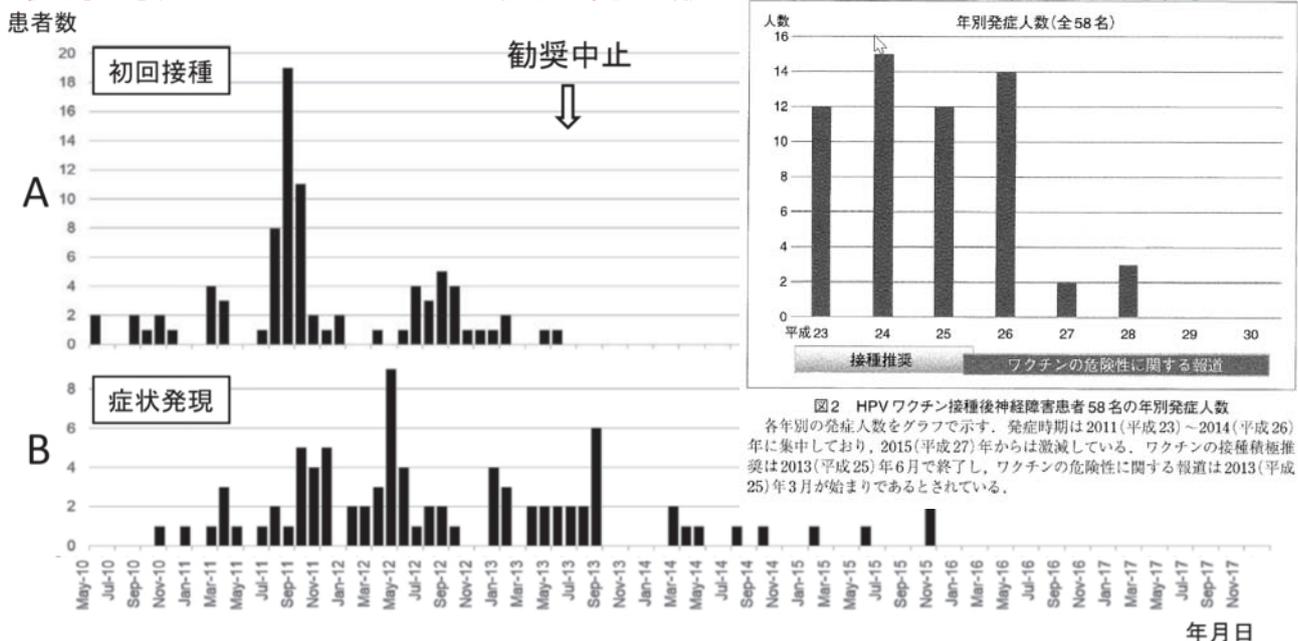


図4 子宮頸がんワクチン接種後副反応と診断された84名のワクチン接種時、症状発現時、副反応当方受診時の相互関連 (文献18のfigure 3に10名を追加した)

「大切に育てた娘が、注射で青春も奪われて、痛みにもがいて、どんどんひどくなる。顔を歪めて、呻く娘。ゴメンネと私は言い続けている。あなたを将来ガンにさせたくなかった。その代償があまりにもむごい」

東京都杉並区から「中学入学お祝い」として「子宮頸がんワクチン」接種を知らされ、娘に勧めてしまった母が悔恨の気持ちをこめてつづる「みかりんのささやき」というブログの一節です。

この少女だけではありませんが、元氣そのものだったのに、ある日を境に、陸にあげられたサカナのようにけいれんする、痛みが体のあちこちを移動する。病院を訪ね歩いて「精神的なものでは」といわれて傷つく。そんな経験をした家族たちがインターネットで検索して、このブログにたどりつき、あまりに似た経験に驚き、3月25日に「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」を発足させました。看病で手いっぱい家族たちを支えようと、首都圏の市議、区議が支援の会をつくり、日野

くらしの 明日



受けやすい検診の確立を

子宮頸がんワクチン被害

私の社会保障論

大熊 由紀子 国際医療福祉大大学院教授

市議の池田利恵さんが事務局長と連絡先を引き受けました。電話番号(042・594・1337)が公開されると「わが子もそうではないか」と、全国から電話が殺到しています。

「子宮頸がんは死を招いたり、子宮を摘出したりにすることになる怖い病気だが、ワクチンで防げるという。5万円と高価だが、期日までに受ければ無料といわれ、それならわが子に受けさせよう、と考えてしまったのです」。こう親たちは嘆きます。

厚生労働省に設けられた専門家の検討会でも先月、2種の子宮頸がんワクチンの副反応が、インフルエンザワクチンの38倍と26倍、重篤な副反応は52倍と24倍にのぼると報告されました。にもかかわらず、このワクチンを国の定期接種とする法が3月末、国会で成立しました。

子宮頸がんは、検診で早期発見すれば命も子宮も失わなくて済みます。ただ、日本のように、男性医師の前で足を広げねばならないこと多い検診法では、女性は検診をためらい、検診率は

は20%にとどまっています。80%と高い英国では、訓練を受けた看護師が、診療所の普通のベッドの上で実施しています。

このような安全で確実な検診方法を検討することなく、まだ臨床試験段階のものを、十分な説明もなく少女たちに接種するのは中止すべきだと考えます。

このワクチンの公的支援が浮上した時、厚生労働省の担当官は「長期的な効果や副作用の情報が十分ではない」「効果を過信して子宮がん検診を受けなくなったら大変」と警鐘を鳴らしていました。それが、政治主導と社会的なキャンペーンの中で押し切られたのでした。



副作用と薬害の違い

どんな薬にも副作用(副反応)はあるが、効果が不利益を上回り、それに勝るほかの方策がなければ、受け入れて治療や予防に使うことになる。薬害は、利益と不利益を比較する科学的データが曲げられたり、副作用情報で隠されたりした結果、被害が拡大すること。副作用は薬が起すことが、薬害は人が起す。